高世負女容記 七

へ遠13
1632
7止

特へ13
1632
7

西世員女宗紙 壹七

同家

一 宗紙の同よりも民部卿の義
付タリ三くのちぎり念おつきと好さうなる角
ぢぐさの意の花方よおぢへね新のうん

二 後よ武士の感が宗を遊屏風
付タリ大和宋の後年馬も毒ものおもてを安
分別を宗ものを思ひよ命乃ものを父

三

四方を回れる行義の一云々

付 夫の首を晒す事頻りなるの下に

投げ捨てし

山ごもる行者の級垢

盆よの塔婆五百本の金

一

唐綱乃国よりも風むよ梅本枕の義

中ごろもの女の様よ嘗ごとを疾疫ぜうと。夫いう時ず

妻女和らのことをもとするよあるぶ。尚産のうつ宇

又いう友達の付合よりしく和のことを遊ぶ中世の常な

るよう事ぜりゆくよりも恪をするいを女をと欲ふよ

うに成ゆくよいこがすぐることを自慢するうとくなる事限

情をと見せく。和文ぜうしくようとする女ぜりてとよ

村の里の物書ともむ〜来ことて近くのほの中陣やど。

名字ぜ宮されく塩方武士の渠ぐ妻女ち里田の猟

師合義のうふ姫まく。而ぜぶちちいすぐこかちの

見ぐもぎめと。武士ちもとて夫婦のかうひ浅ぐず。

さればこそ安あまりよるを深くそなつかしきまくらに
涙をそそぎのどくは思ひいとあく寝中の物ごろも袖と
くまなくかよふうろの花のちりうるこゑ〳〵行水流よ
氣色のわろう見えもあてに女のふるぎく是ぞものな
らぬこゝろ葉をやはいぜんい来の始づまそ塩ぐま
も其男の金無つよく。おほくの男をとすてかりの花
をねがひ事とする物来るとすてぬなどよいちをう
とする男わいて勤めの内金をもて埋ずでにを男の
女房よせんをもつぐ世中ようつくる事をもとめる
恋をうこぶんの姫よ浅根やくをうとぬよりてくのあ
下よつゝあれどの肩人よれそんの事。男いけ如何よ
のがりはのとする事なれど中くを相法よのゝざるを

如何さまて事〳〵是をこのおいごゝーの法うあすはつよ
でもこれず。さう〳〵御所見よのかゝづく事国よ人へて私を
ひまもんくもせど所の中の事で事。そなを中なりむさう
にくい所を思ひきりこくるぶ所い和へかづきもんわいぶ。
わ法をうれてそのは方とふうねよ如何へと是見すぶ。
男性人ず相いさい今こいつりて我よ今結をもをも
分信をこもてのもちうひての如〳〵男ゆんとやこいい
力ぶ面びをよいすまて心事ごう。是ぶいぬうと
立根をするを如何如何ぶ和よ男をうらくをきまる
うぶもそやつれをつ中ようるませあよあるるさ不い
中を男よ人もて所の為よ如何房よそいせんとのいを
くぶ如何ぶじまこのわるるのいわ。さもぶのち男

とりこぞいゑをはきくそくごんぬぐこかるぶ岩
に京て男とりつがつがそんよくぐごとらて田よ高嫁
ぐ地ぐごとるねぐごぐりトされぐぐ作よむ有る岩
の老ご急鉄男のこもすぐりしてこぐぐぐぐぐぐぐ
地高ろうこぐ地好ろうとかるに武ろ人をすぐく
ろりくろるこ武れと高女見ろ人ぐすぐこと
人と仲立よこのみ高ら女房をさるゃぐのこのびれ
をこうらく勤わ名をぬ地おもとなぐ考えるとれ
かこうるにくこずこれをいよくぐれのまこまちう
こはりしも。あわけぐこのこと急にいぐりわとくる
しあて。鈍のみ沖る丈と女房い割よりわ行こる
を思よ考せるをてぐくるぐりはこいるこをきてこさ。

寝ぬ月の奥の痩せる丈をにゃをおそろこさろこと
ゆ人こさより急ようしすく中をここぐるい名女れ癖
ぐこそれろ武ら方ろうこさくぬぬよく毎夜の通婚よ
女房いもひのわむこを高こ人わろくこぐ見ひよ万年
のかくごゆぐれてあるれ家ると申し旅人の松をむろ
にすぐんかりこ人こ。けつるきる居これぐでめこ旅
人もれれさぬ安ろるるこをこつろう人るねぐかく不義
ろ寄月といだ考えるぬ女のこぜいこ。ちこいの行るち
ぐろをすてぐけてこてこ時こ年につよあこぐ。旅
人いよ方をこてやろける。因果く女房こ私の性のあ
ぐごみてここる考しこくくあをこのぬつこさこび人か
行出の人やこ名行くいみもぬぐここてきぐれの

長谷寺。おなじのさまにて武たろうは味はあい
さりけさてず。せひつく前うりて死ぬわさまつく。其死
とかこの部よりて多也をうさ鞭をもつい左衛門
つれかりてせあて所はなりて元とかんくかく拍竜
つきまて別をしものいたう悔てそくを剥ぎこうを
知るくのいつ何せて華れの場にて後と剥くるな
さりとそぬ〜ぎや古き屋敷をなこうるくとど
ろくにてむる。是はや与義のう教字教のみ業
としてこうも此放逸知見の行跡をもくの沢をよくの
足懲をあ〜ひ〜けるうおそろ〜げれるくしは女の鞭
を上毒よりくをのく当りて仕る高る事形ろ
しる。彼も恨むつよ歩かして。取るくおれのさとおこそ

きをもつくせよりしすこうして。武たろう家よりあるう
りやさうくい情なのあるうようなきれ義のうさ
ぬをりがす中。こる理てれのねこうたちゆ（ねとこの名
の科をこれをりて浪さ）びあわれ。わこうく武たる
この此こうにまこて明義よくこる歩験をを
拆で如者があくはやいやはくくの義仕よりて
女の迷哭こがりているくこうの武形く共居おもくこうねに
りて武たろ一生代恨をはこるこう幸はる純

（二）後よ加武士の感状宝を歩延房風

るくは安義のくふ徒個敬よ危病くりて家ごとに会者
乃晃ばざるをこうり歩。されども伊名大祢宝〜大沢乎左
揉中まる。何の悪左歩中ひくに祢のおくあさうず。

はしびの所にのれる事をゝろびはれ来りて。播磨
三百六十七人ありつきてぶうもゝ又ゝ来りて下向い物淋しく
かりう大坂よりぶうく西ゝ橋ゝろくゝの船よ乗ぶゝと
支度して。又かゝるひくゝやりて又拙せんもゝろかゝ伝
法寺和尚天王寺ゝとのうゝてい後のくやゝすゝ和ゝ
ずゝ。おやしゝ千年ゝ橋ゝよりておのく乗船して
七ふ四郎をひろゝ薬問屋ゝゝ。ねんたつよに去
ゝてゝ。ゝる場ゝこゝゝもゝぶゝ乗られ所よ乗ちゝ。ゝてあ
おりゝ何ゝゝてゝいゝぶゝれけん。拙ゝ和ゝぶゝとゝ
潮ゝ西ゝ出ゝゝ。ゝを作りよゝてゝゝきゝろゝてゝ出ゝを
ゝゝのゝゝる一人ゝ人ゝぶゝ。安芸の船ゝゝぶ。疾ゝ出て
ゝゝゝゝ船ゝ船のいひやゝを出てゝ船ゝ

やゝ。今ゝてゝ西ゝゝるゝぶゝ出ゝゝゝ船ゝを
ぶゝ乗ゝゝゝゝ

和しさぞうて番ていて人ぼうやして弱るさて男丹
そうでひよはやらうでしかくいい合用は和ぬ指くこうさる
くどのあるもちうでわるよくやかるだんでうあていぜひ
よあわと思い山細屋下よ一日ぐしにあるくこのあんを
絞りさわよと世よなのもしまうこぐぱとうて若ゆく
米人くと思ちきて山れうくちあれぐうもかもまくとおりり
りせぐと米分人よなのまるくかぐしれまくこよわくねどうた
生のうん一樹の陰くばりうせと面橋はしてを絞の
焼ちくてうるうる麻くて寝くまぐとかれよ火を
黙くてみりのまやすみれくといつせきのもりねの
をわてがいを見い道の中ちう出れりて工夫して。
小石を幾所のもちくべてあくのさ麦のくおうさうる

御ようくさけで家の方へ勢の後へと動かす事扨
武士の家とくらとうめ武士でて人の心をうけよひん
てちよとうをうひ乗物おりの裾へ長ず長のさち
しとおりの長は長くとりてみらくみが長をつる
長わ男もいづまてさらくうこのうつぎのうつとうつ者
の日ちまよう如のわいさひ御人の御奥向も
うをの女房もまとたかは長ますかもかつぐ者
わでこうとかりの男とわれをまて中く世とをうらの
つうつ。乗物も今い拵ちずく粧と出
うちんで茶屋より仕る業をあ。この祝に長くが妹る
長後綿補玉屋の賀うつてうをとうかるう
形。長ひうくでうぬの中ぐ世ようのみるいわう

ぐでうて茶こうぐいずかりを大坂よれのうて親長ち
ハ祝けてのがうをる二月長て長ぎのがて
長ちよ乗。潮くます年修ちの今月今日和ぐ
は紙なもて沙りを月付長ぎるふのよこびわ長
ちて。ちちうい姉ーなぐ今ぐのをちつまうるう
うとわしてさちうとうをちる月ぐ親の中ち
ちうぐう。月ー出私の叶ちの中ちの如迎て長私の
ちいみの松おの後よづくうみをあ。一の潮ようく人
数と改むるおりの形うう月くねよ移ちあくうとぐ
ーてうれすとをとすりくうのわぐくなのぐ帳を長後
するうをぐひうく。高立年七人の接数もするう子氏大
後とのの子細もうりしてよさうくふ中のたうをと仕

おもしろくてうたがはしく新宮たちはこれをずいぶんこまりぬ。姫のうちは
城内とすることなくすでに自害せんとすれば新宮たちは
とあえなく城を出でんせんとすれども遠方をわたり是を城にして
ものうちとられぬ。大海は長くるまで支度のうち今河
輝盛の兵ら伐よ人数しもあまり宮人の情にて安す
よのんどもそこのうちにこれを洗ものんどもはつ。そこ
とこれんぐこれていれのの役はそこずそこくおのの大海へ
敵しくめられでこそ面くるこのやくおくすこしも
そこまれるざるあるずそれかぐは高橋よ人を撰
氏男にてもぬ。はそこまもあとかをせくこ大海へ寄
かうてはられとこの理如松のいひんよ。ぬ手伝しあ
くいてんぐのうちはかりぬ生死をはの宮ちその後

身がこの命の捨りんと小和をしのぶ。毎日くこの
てもわいずもそこなもあのはうーとおりひこぐめく
今宮ぬ人是のきいはるよ。さらにもちはあ新兵
給ってをすりるる兵をこの人ちはの姫さ。そ
いくに伝習大和守の御おもとを松平
ぬうちあるこの役をかくこの合戦法
まて用行よくれ宮人はけりるる海
もこそぬるーとこ。俺こもあずはこの
こ。はいの用をせんこ。宮たちは手伝いんですひ新。
おりいい松もうるを姫宮の中。なりこうきてこ
らん中のるーく。ぬうこと楽みをこの姫のかく知元
出てこるよのこ。敵よひこ。ひてこ食の毒こ必げるこ行

わけてうこゝろもはゝ一ぱうとぶ所ひとうよわ多四
さとうくゝりそられてわ〻て安藤のむこの出でわるこう
奇〻さ序出芸ちいおりのとのせそ子里一瓦のくとう
伊せくくゝ知ゝ子ゝ伊りゝ。楽外をこれ代巻ゝも子ず。
幽屋下よ立伊りて世界を手げ多る遥よわ比し性人
の姑娘をなくゝ多ゝ比ぶ比いよ楽外一かる是と楽
ゝけ多て相もはもゝ多ゝいい安のゝ子れよ一遊こゝろと
いゝでいゝで安相よゝで子べ身でけぶゝ子ゝ子ゝ相ゝ
ゝいゝ一ゝぶのすゝをいゝゝりよおてけゝねぶいぶゝよ
芸ぶゝゝゝ多ゝ多ゝくゝりゝ世ゝくゝゝゝゝゝみ所ゝ代ぶ
をおゝち川ゝ川ゝ出堀よゝゝゝ川ゝのゝゝぶゝよわし
ゝ女ゝゝゝゝ多ゝ知ゝられいゝくゝのゝを訳ゝゝけゝ多ゝ

[illegible]くは[illegible]てそのわけの見出をとりてえんをうかべ[illegible]
[illegible]てるらんせんをねりわせよいれてさて
[illegible]びこゝへゆりかりゆくゝ所きづくあり一時うつくしてさて
[illegible]ぎるまでいきの[illegible]なれてさて[illegible]の一之
[illegible]うぶ是又[illegible]く所見[illegible]よまとせくてんいかゝと
ぬりこゝろてびあいなあ新[illegible]のえんつをとてるも
そのおびんともなぶーかりてるれまでくと思ひこみ
かぐこをかゝこの[illegible]なてなぎさのこゝをとのこ
[illegible]ぶ[illegible]。おゆるくゆりかりて[illegible]
よあい[illegible]のかりあゆをあーてさまゝみゆく
[illegible]くこゝけ。ーんゆ[illegible]こゝ[illegible]
[illegible]る中是ゆのゆまでまゆ。[illegible]とやいん[illegible]

[illegible]むされば山樂みとも[illegible]八[illegible]の[illegible]
[illegible]の所問して[illegible]
し[illegible]しば[illegible]八[illegible]
付る[illegible]を[illegible]て[illegible]
[illegible]の家[illegible]
分一軍[illegible]服[illegible]
[illegible]所[illegible]て他[illegible]
所代[illegible]てぜひ[illegible]
武の家[illegible]
[illegible]
く[illegible]
[illegible]
[illegible]

らず義理をもつぱらゆゑ、夫とわるびれ身のわざつよく
妨をかまへ作ゆゑ、夫婦の仲はなはだ
よろしく、親よりさん石塔、彫りて古郷に送りて
のこりとうるべし。人の切をもつてさしつかへ
てを世よりもつて絶人を秘べし。
(三)肥前国城間和右衛門仁義の一言も千万金
深恩を決断する人の出る事の家業なり。若右
世の義よりよりする松の木、歳秋う境目を強く出る事
なり。山の東の春は花を見て稲穂の百姓て
山を事ぶ分明して毎年の御裁許ありしは其法
まことにありとの字人なれよりの絶のよう。こと
して万事人の特をしさがる事無ぶ。

春は苗ちの傷品を解ぶ分よりよく知らと
ぶ。山の利分を結るはさるをもつて
米穀の稲穂の百姓たるの苦伝してそれは嘉場
やるよう。浅い公事の根之よりいろいろに定法をつい
山事とをもり而よりはいとうしやられず。即此
るるるは山云ひして稲穂ありをもつて今法を
ものめるる。大宛のめるるはるく。
前と秋はの世にさるされるしくかのぐこうはるう
をれいつもの毎い近辺事年ふ
しよ。山事とをもてるみかるし年と事ぶ行
妻女い武士の婚そかいぐしく。
おいての前以徹つの事ぶ

よおはゆきを。葉らんこいはひしーうどもさすがはさこのうれをなで。およさてえんゆう事仏おにたをと。老母よは生れひとりよさでせわたちう前をうんせもうふ梅を思ひのみよを毎わたらう妻女を流つけく。善方妻の身ちく獄つよわうし杉これ前をわすえ事りし事をせるを出事こうをうんがそれを杉こふはづしわふ紙て海の屋根をあぐ。そよがぐ杉とと子物よ思ぐわたうわる亜すをはぐちこそちひすをを見えをてそ。でわざらぬ。るそもいて。ま妻女の網をはんてう男のすひ善方をを子用ぐやしにを下るよにし海まて。今ぬとをとろをとろひをうをんとぐめの小亜のうよそつのうて所をを

しくらとおもひて山芋めよいを方ゞ会〜けるぞや。高ざ
社法華（おゆきく長海くそのかぐ〜のかよは山
貧をさしをくぞ。是せやてもの意地ちうけぞ
りんと見る人かゞ〜の恋すハせまで考と懲こてく
芸のよ出る。されぞ人のをゝ〜あてる中又わたゞ
よのれが色とは世てて滅〜て事年をうゞよくゝ高び
なしそれとかくねらこきてれぐは事をく人ばして
欲ふき出ち。みりをかるる色すをたゝ傳ぐをくけ
らびをさしをちゝとちゝ行よきとま女
者ち原程ゆ松よ色ひ芋うの者を社法野よりち
ゆきこ。そのごく懲つよさしきるそれよとまと
母の作て毎日ちら一子ウゞモを。義女先つ〜て

懲つのまのよよ切。芸方ゞ父ハかる恋年をかく
貧と作人の見せ色よさしかぶうびぬ人のち
恋ちく。芸なのこよはくちゝをて恋者。ウゞモ
切ウよかるしくもりんよ恋ひ行ぬ恋ぬ人へて世ん
節ちのこよぞれ父ゞ恋ん人とすぐんく骨懲よ像！
て学ゐとうゝの武義をと松云古し。会月よ片時も遊
ぐぐぞ。武屋よやナ七の時市出うて女の歌付のあ已
に是よ物ち方〜〜手掛をわゝう。菖蒲の地家つあ
〜出ぞれ武百人の御切りをぐめて以義仕ゝ。ナ三
ゝ〜屋根の御言先ゝて松義ものを三人をかゝ〜めた。
ちゝの年同ゞ紐の毒沢原ちゝ毒井角ち文と口縁
よ及義事あゝて。ち方切ぶび〜中へく高びよく

元うひ御はさせ事れ出ぬ。其ハ年ゟ九ものを
しきさぐき。かけ又九八の三月八日ゟ御領地大火事
まて役人はせ出わぐみ〜をくけとりて逃ゟ出づ。
同じ年五月行る家来を五人ゟ。故付ゟ月ゟ如意
所まく町ゟ役をかしゆう。記録の出入ゟ義を裁
許をしまする。其三ゟ七月ゟ物以
ゟ作せ付き。御倉役の来ゟ御屋をゆるされ一ゟ
名とわげをゟ。此時以又ゟ
又ゟ〜ゟ〜ゟ〜ゟ。是いぐ定
家老のわれぐの事ゟ。ゟ七ゟ又振
ゟ〜ゟ父ゟ事も絶れさ〜〜ついゟ五名とあらは
ゟ。ゟ七ゟ者ゟ〜いゟ実親毎ゟ人ゟを〜名ゟ

てこてくゟと人ぐ支会録のごく世の寿ものとよられ浪く
出ぬか場作せ付られく。武ゟ之ゟ家系山時ゟぐくゟ御
晴を事清く同宝ゟわぐ家山ゟ之義。家の代変へ付座
く父ゟ五ゟが行られゟ。私は世に碑ゟ孫を切く家
いゟ〜く立後世人のゟぐ〜を記事ゟとそゟ七ゟ云
ゟゟを尚年を浦色をぐ大会楽寝見和遊
を株ぶ〜武と勧ゟ文ゟ在びたゟこれず考ゟ意さら
ぬ事ゟ出ゟも事ゟゟて下くゟ傳ゟ。是又ゟゟ
のゟぐみ出ゟ。其ゟて後ゟく出義をゟく作ゟ
傳ゟ七ゟ碑の孫のゟを是ゟゟすでゟ是をゟゟく
ゟ。今ゟゟ五ゟ実ゟを又ゟ記ん為ゟ。御事を
事く称ゟて法人ゟゟ事。是をゟの孫会ゟ

く。男下の事を行うる所なれども人倫の道なる所の
碎の紙をうけるをうけ。なぜ。傷ましき
和尚なるも。精を出す四の幼く綱皆祖母老母の指図の
う。とくくまを持る女是をかぐこまずべし皆教ふ
をうるようる我うし。わたうど母耳をうけしゆへ伯
母を恵ふ。ぶ。わたうど教訓せず。世ふれ
ふ恵ふをなぐすくいの者ふもせよく孫とゆ恵ふう
ゆへ。かるわたくしそうそけるを。子をきく恵ざるい教の
科。天乃是をにくみ給事。あんてふるぶ